色彩研究の方法に関する一考察
―色彩の生み出すリズム感についてドローネーを事例に考える―

1．はじめに

本稿では、色彩のリズム感に焦点を当てて作品分析を行う。

視覚芸術の「リズム」は音楽用語からの転用であるといわれている。絵画における「リズム」は「同一の形態や色彩が、間隔を置いて配されることによって生じる視覚的効果」を指す用語である[1)]。視覚的なリズムは「空間における点、線、面、形体の規則的反復によって生まれる[2)]」。

絵画におけるリズムについて先行研究を調べたところ『みづゑ』『美術手帳』その他に評論が見られるものの、研究論文は見あたらなかった[3)]。一方、色彩分析に関しては日本色彩学会において様々な研究が成されている。研究タイトルから、その方法には色分布、代表色抽出、色差、配置等々、いくつかの視点があることがわかった。

そこで本稿では、オルフィスムの画家ドローネーを取り上げ、その作品の中でも最も単純に見える「終わりのないリズム」を対象に、色彩の配置とリズム感の関係を明らかにする。

なお、図版はコンピュータ上のデータ（Art Cyclopedia）を用いているので、分析結果が原画とは異なっている可能性がある。

2．ドローネーとその作品について

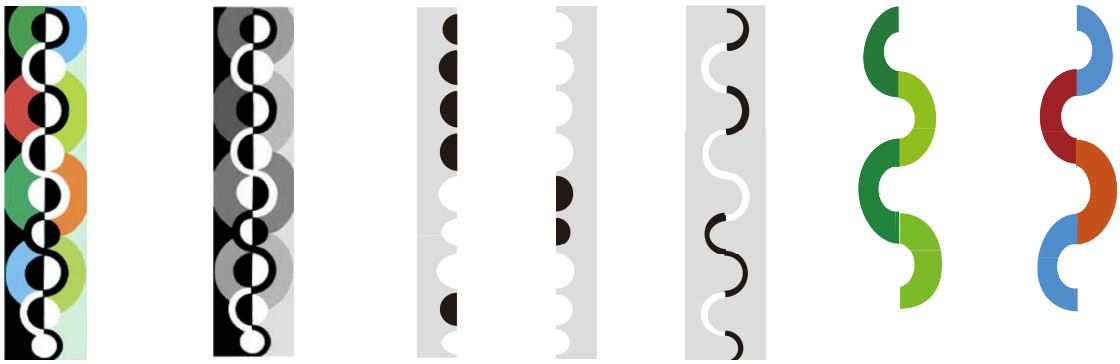
ロベール・ドローネー（Robert Delaunay, 1885年4月12日－1941年10月25日）は抽象絵画の先駆者の一人である。ドローネーは1912年頃には既にキュビスムを脱したといわれ、「窓」の連作などの純粋抽象に近い作品を制作した。前衛芸術の擁護者アポリネールは、ドローネーに代表される絵画様式をオルフェウスに因んで「オルフィスム」と呼び、ドローネーらの作品を、他のいかなるものからも影響を受けていない独自の芸術、音楽と同様の純粋芸術と位置づけている。

ドローネーは「光」と題する書き物を残している[4)]。その中の言葉が、ドローネー作品の魅力の鍵を握っているように私には感じられる。下に引用する。

自然の光は色彩の動きを作り出す。
動きは現実性を構成する思いもかけない要素や色彩のコントラストの調和した関係から作り出される。
この現実性は広大さによって付与され、リズミックな同期性となる。
光の中の同期性はハーモニーであり、色彩のリズムは人の姿を作り出す。（後略）

ドローネー「光」（1912）

下図①は今回取り上げる作品、「終わりのないリズム」である。この作品では、同一の形態の繰り返しと色の変化によってリズムが醸し出されている。よく見ると、そのリズムは一定の形態や色彩の繰り返しではなく、もっとファジーで複雑で、それ故に体温を感じさせる要素を持っている。そこで、この作品について配置と色彩の視点から分析したい。



①　②　③　④　⑤　⑥　⑦

終わりのないリズム　グレースケール　中の円左側　中の円右側　⑤中の円を囲む線運動　⑥と⑦色彩によるS字型運動

ブローの範疇に入るのはそのような複雑で微妙な色彩操作によっていると思われる。

３．「終わりのないリズム」の分析

図②は「終わりのないリズム」をグレースケールで示したものである。明暗だけになると中央の線運動が白と黒の半円の連続に干渉されながらも、全面に突出して見える。両側の色彩部分は明度差が色相や彩度に惑わされることなく明確化される。しかし、絵画としての魅力にはいかにも乏しい。

図③と④は中央の半円を抽出したものである。規則的に並べられ、左右対称の同じサイズの円形のように見える白と黒の円は、厳密には左右対称ではなく、同サイズでもないことがわかる。これらの半円だけでは、心地よいリズムが生み出されてはいない。むしろ、歪みのあるリズムを演出しているといえよう。また白黒の配置も規則的ではない。

図⑤では③と④の半円を囲む線運動を抽出している。Ｓ型モチーフの連続線は中央に白のＳと黒のＳをつなぎ、その上下にＳのパーツを配するという方法がとられている。規則正しく並べられているというよりむしろ、任意に配置されているように感じられる。

図⑥と⑦は色つき半円が③～⑤によって隠蔽されている接合部分も含めて表している。すると①では４つの２色からなる円がおかれているように見えるものが、実は⑤のＳ型モチーフを拡大した線の動きであることが分かる。また、左側はグリーン系の濃淡のＳが２セット連なり、右側は上下に青系の濃淡のパーツを配置、赤系濃淡のＳを囲んでいる。

用いられた色彩は、Ｓ型の連続線で見た場合には青を除いて、薄緑を背景とした右側の方が彩度も明度も高い。Ｓ型の右側も左側と同じ強さの色でできていると仮定すると、右側は背景の薄緑と調和せず、右部分と左部分の前後感も生まれなかっただろう。

表には16進コードと色相、彩度、明度を分析した結果を記した。さらに、背景の黒と中央の半円、それを囲むＳ型の黒は、赤系、紫系、朱系の３種の色相があることが分析の結果判明した。この作品がデザインではなくタ